

論文の内容の要旨

論文題目 日本語と韓国語の音節音韻論

-制約相互作用による直列派生モデルに基づく分析-

氏 名 孫 範 基

本研究は、日本語と韓国語の音節構造と関連する分節音音韻現象の諸相を調和的直列派生モデル(Harmonic Serialism, Prince and Smolensky (1993/2004: 94-95), McCarthy (2000, 2002: 159-163, 2006, 2008bc, 2009); 以下, HSと称する)の枠組みで分析し、類型面では両言語とその諸方言の音韻的類型を明らかにすること、理論的には現象の説明としてHSを適用しその補完を提案する、という二つの目的がある。

子音と母音は、音節の内部および隣接する二音節の間という環境において、通言語的にある一定の傾向が見られる。子音は、音節内の頭子音と末尾子音において分布制限と交替現象の対象になるのは末尾子音のみであり、音節間の子音連鎖に起こる同化において同化されやすいのは頭子音ではなく末尾子音の方である。すなわち、二つの音節環境において常に音韻的制限を受けるのは末尾子音の方である。母音は、音節間および音節内における二つの母音の連鎖は嫌われる傾向があり、様々な修復操作によって回避される。日本語と韓国語は、この二つの音節環境における子音・母音の音韻的傾向は類似するが、その詳細は大いに異なっている。

本研究は、両言語の分節音音韻現象に現れる類型に対して、個別言語に特化された制約ではなく、言語一般に適用可能な制約と言語による制約優先順位の相違から説明する。また、理論面においては三つのことについて論じる。一つ目は、不透明性の問題に対する理論の適

用である。二つ目は、従来のHSで説明された音韻過程の見直しとその補完である。三つ目は、HSで分析されていない音韻現象に対するHSでの新しい分析の提案である。本研究は、以下のように構成されている。

第1章は、研究の目的および意義を述べ、両言語の分節音目録について記述する。

第2章は、本研究の理論的枠組みであるHSについて概観し、その構成要素の一つである制約部に関する本論文の基本的な仮定について論じる。ここでは、有標性制約の定義の仕方について論じ、また自立分節的な音韻表示を統合的に捉えられる忠実性制約の全体像を明らかにする。

第3章は、音節内に現れる頭子音・末尾子音の音韻的振る舞いを取り上げ、日本語と韓国語における末尾子音の分布および交替に見られる制限について論じる。本研究は両言語における末尾子音について、単なる表層の子音目録の記述ではなく、その背景で働く普遍的な制約とその優先順位を探ることによって、それらの子音が末尾子音として現れる必然性を明らかにする。さらに両言語の諸方言にはある限られた音韻環境において無標な構造および有標な構造が現れている。日本語の鹿児島方言では、共通語にない語末高母音削除という音韻現象によって末尾子音が生じるが、そこには調音位置の削除や有声性の中和などの弱化が起こることによって無標な構造が現れている。韓国語では、末尾子音には有標な調音位置や聞こえ度の低い子音が自由に現れており、一般に末尾子音に対する制限は顕著ではないと言えるが、子音群単純化という限られた音韻環境において、ソウル方言ではより有標な調音位置の子音を残すことが好まれ、慶尚方言では末尾子音としてはより無標な聞こえ度の高い子音が出力形に現れることが好まれる。

日本語の鹿児島方言・諸鈍方言およびソウル方言・慶尚方言では、上に述べた音韻環境においてそれぞれ摩擦音の口蓋化および平音の硬音化が過剰適用するという、従来の最適性理論では説明のできない不透明性の問題が生じているが、HSでは漸進性に基づく中間段階の存在と有標性制約同士の支配関係によって説明する。韓国語の一音節内の子音群単純化は、音節制約の違反を解消するための子音削除であり、McCarthy (2008b)の音節境界を挟んだ子音群単純化に対する「調音位置の削除 > 調音位置指定のない子音の削除」という漸進的削除が適用されない例である。削除は、削除の引き金となる範疇的有標性制約が対立する忠実性制約を支配することによって決まるものであり、派生の順序は専ら構造変化の引き金となる制約同士の優先順位によって決まるのである。

第4章は、両言語の音節間における子音連鎖に対する修復としての調音位置の同化、および子音連鎖の聞こえ度の変化と関連する適格な音節接触を守るために起こる韓国語の調音様式の同化と日本語の母音挿入について論じる。この章では両言語の同化の引き金となる制約の

相違と、同化パターンの類似性について論じる。また、韓国語の調音様式の同化と日本語の母音挿入は、音節接触における下降パターンを守るという同一目標のための異質の音韻過程である。韓国語の調音様式の同化は幾つかの個別変形操作から構成されているが、本研究では音節接触の制約を細分化することによって従来論じられていない新しい派生順序が得られることを指摘する。また、本研究は、日本語の二字漢語形成において音節接触を守るために母音挿入が起こるといふ新しい提案をする。

第5章では、まだHSの枠組みで論じられたことのない音韻現象である母音連続の回避に対する新しい分析モデルを提示し、経験的に日本語の東京方言・足久保奥組方言・首里方言と韓国語のソウル方言(中高年層・若年層)・江陵方言において起こる母音連続に対する修復について論じる。本論文は、母音連続の回避の引き金となる有標性制約としてONSETを設定し、その制約の違反を解消するために「分節音レベルの修復」が適用され、さらにその結果生じた素性レベルの有標な構造を避けるために「素性レベルの修復」が適用されるという漸進的な母音連続の回避を仮定する。その結果、「分節音レベルの修復」において諸方言に見られる多様な修復方法をより単純化し、挿入子音の類型や母音の組み合わせによる融合母音の多様性に関しては「素性レベルの修復」からその仕組みを明らかにすることが可能になる。

最後に、第6章は、本論の内容をまとめながらその意義について述べる。